

イザヤ書9章8節-12章 「回復するダビデ王朝」

1A エフライムへの裁き 9:8-10:4

1B 建て直せるという高慢 8-12

2B 懲らしめの軽視 13-17

3B 互いの噛み合い 18-21

4B 不正な裁判 1-4

2A アッシリアへの裁き 10:5-10:34

1B アッシリアの高慢 5-19

1C 前例による征服 5-11

2C あべこべの役割 12-19

2B 定められた壊滅 20-34

1C 残りの者の立ち返り 20-27

2C 倒れる高い木 28-34

3A 実を結ぶ御国 11-12

1B エッサイの根

1C 主を知る統治 1-10

1D 主の霊 1-5

2D 平和の広がり 6-9

2C 残りの者の帰還 10-16

4B 救いの喜び 12

1C 救いの保証 1-3

2C 喜びの歌と宣言 4-6

本文

9章8節から10章4節までは、北イスラエルに対する預言になります。

1A エフライムへの裁き 9:8-10:4

1B 建て直せるという高慢 8-12

9:8 主はヤコブに一つのことばを送られる。それはイスラエルに下る。9:9 この民、エフライムとサマリアに住む者たちはみなそれを知り、高ぶり、思い上がって言う。9:10 「れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」9:11 そこで【主】はレツインに敵対する者たちをのし上がらせ、その敵たちをあおりたてる。9:12 東からはアラムが、西からはペリシテ人が、その口いっぱいイスラエルを食らう。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

「エフライム」とは、北イスラエルで代表的な部族で、エフライムと言ったら北イスラエルを指します。「サマリア」は北イスラエルの首都です。主が北イスラエルに対して御言葉を語られました。その言葉のとおりイスラエルは弱くなり、脆くなっています。煉瓦が落ち、桑の木が切り倒されたという表現を使っています。ところが、弱くされたことが主からの注意喚起であることを考えもせず、「倒されたのであれば、また建て直せばよい」と思い上がっているということです。当時の北イスラエルは、ヤロブアム二世の治世で、北イスラエルの中では最も強く、大きくなった時です(2列王14:25)。

彼らは、イスラエルの立て直しのために、これまでは敵であったアラムの王レツインと手を組むことにしました。ところが、彼らがこれによって自分たちが守られると思っていたその方策が、かえって仇となっています。というのは、東にいるアラムがレツインに敵対していました。(これは、レツインの治めていたアラムの地域とは異なるアラムで、他の王が治めていました。)イスラエルが同盟を結んだのでイスラエルもアラムの攻撃の対象となったのです。同じように、ペリシテ人もレツインと敵対していたので、同盟国イスラエルもペリシテ人の攻撃対象となったのです。このようにして、自分たちが脆くなった時に主の前に出てへりくだらずに肉に抛り頼んだので、かえってさらに、自分たちが弱められていく姿を描いています。そして、「それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。」という言い回しがこれから、繰り返してできます。これは、彼らが悔い改めないでこの御怒りだけでは終わらない、ということです。

2B 懲らしめの軽視 13-17

9:13 しかし、この民は自分を打った方に帰らず、万軍の【主】を求めない。9:14 そこで【主】はイスラエルから、かしらも尾も、なつめ椰子の葉も葦も一日のうちに断ち切られる。9:15 そのかしらとは長老や身分の高い者。その尾とは偽りを教える預言者。9:16 この民を導く者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる者となる。9:17 それゆえ、主はその若い男たちを喜ばず、そのみなしごも、やもめも、あわれまない。皆が神を敬わず、悪を行い、すべての口が愚かなことを語っているからだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

「この民は自分を打った方に帰らず、万軍の【主】を求めない。」という言葉、とても残念で痛々しい言葉であります。愛による鞭、主が心を痛めて懲らしめておられるのも関わらず、そこでへりくだらなかつた、ということです。

そこで主が、彼らが悟ることができるように、二つのものを切り取られたと言われています。それは民の指導者たちです。それから預言者たちです。民の指導者は悪い者たち、彼らを迷わす者たちですが、それでも王がいたことによって国が守られていました。しかし、北イスラエルの末期は、王は非常に短命であり、その家来によって暗殺されて、その家来が王となって、さらにその家来が王を暗殺するという歴史でした。さらに、偽預言者も取り除かれますが、王たちが頭と喩えられています。偽預言者は「尾」と喩えられています。なぜか？それは、王の意向をただ追従して、そ

れを神の名によって預言していたからです。真の預言者は、王や民の意向に真っ向から対立していても、時流に迎合しない言葉を持っています。

3B 互いの噛み合い 18-21

9:18 まことに、悪は火のように燃えさかり、茨とおどろをなめ尽くし、林の茂みに燃えついて、煙となって巻き上がる。9:19 万軍の【主】の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火の餌食のようになり、だれも互いにいたわり合わない。9:20 右にかぶりついても、なお飢え、左に食らいついても、満たされず、それぞれ自分の腕の肉を食らう。9:21 マナセはエフライムを、エフライムはマナセを、そして彼らはともにユダを敵とする。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

イスラエルの地が、敵に攻められて火によって荒廃していく様子であります。それは敵の攻撃であると同時に、主の御怒りの現れでありました。飢饉も激しくなっています。そこで彼らは、心を頑なにし、悔い改めなかったので、「だれも互いにいたわり合わない。」ということをしします。つまり、仲間が噛み合って、食い合っているという状態です。ですから、仲間であるはずのユダの国を攻め入ろうとしています。シリアと共に攻め入ろうとしました。教会でも、同じ信仰者、同じキリスト者に向かって挑みかかります。「気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。(5:15)」

4B 不正な裁判 1-4

10:1 わざわいだ。不義の掟を制定する者、不当な判決を書いている者たち。10:2 彼らは弱い者の訴えを退け、私の民のうちの貧しい者の権利をかすめる。こうして、やもめは彼らの餌食となり、みなしごたちは奪い取られる。10:3 訪れの日、遠くから嵐が来るときに、あなたがたはどうするのか。だれに助けを求めて逃げ、どこに自分の栄光を残すのか。10:4 ただ、捕らわれ人の足もとに膝をつき、殺された者たちのそばに倒れるだけだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

掟は、神の義を示すためのもの、そして弱った人々を建て上げるためのものであるはずですが。ところが、彼らは自分の欲望のために掟さえも変えてしまいます。そして、貧しい者、悩んでいる民をさらに虐げます。それで北イスラエルは、アッシリアによって捕え移されます。彼らが助けを呼んでも、そこに主はおられません。自分たちが豊かであった時の栄光を残すところは、どこにもありません。倒れるしかありません。

2A アッシリアへの裁き 10:5-10:34

このように主は、アッシリアによってイスラエルに対して裁きを行われます。けれども、次からが大事です。裁きの器として用いられたアッシリアに対しても、主はしかるべき裁きを行なわれるということです。主は初めに神の家を裁かれます。しかし、なおさらのこと主は、福音に従わない人たちには裁きを怠りなくされるということです。「1ペテロ 4:17-18 なぜなら、さばきが神の家から始ま

る時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょうか。義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。」

1B アッシリアの高慢 5-19

1C 前例による征服 5-11

10:5 「ああ、アッシリア、わたしの怒りのむち。わたしの憤りの杖は彼らの手にある。10:6 わたしは、これを神を敬わない国に送り、わたしが激しく怒る民を襲えと、これに命じる。物を分捕らせ、獲物を奪わせ、道端の泥のように、これを踏みにじらせる。

北イスラエルが裁かれていきましたが、その御怒りの器として神はアッシリアを用いられました。紀元前 733 年には北イスラエルの多くの部分に侵略し、捕え移しました。そして 722 年に首都サマリアを陥落せしめます。

10:7 しかし、彼自身はそうとは思わず、彼の心もそうは考えない。彼の心にあるのは滅ぼすこと、少なからぬ国々を絶ち滅ぼすことだ。10:8 というのは、彼がこう思っているからだ。『私の高官たちはみな王ではないか。10:9 カルノもカルケミシュのよう、ハマテもアルパデのようではないか。サマリアもダマスコのようではないか。10:10 エルサレム、サマリアにまさる刻んだ像を持つ、偽りの神々の王国を私が手に入れたように、10:11 私はサマリアとその偽りの神々にしたように、エルサレムとその多くの偶像にも同じようにしないだろうか』と。」

アッシリアは、サマリアを陥落させた後にユダの町々に攻め入り、エルサレムにまでやってきます。その時に、彼らが忘れていたことがありました。すべての元である神ご自身を認めなかったことです。神が行なわれていることなのに、神を認めないので自分が行なっているように思い上がったのです。アッシリアは帝国主義でした。帝国主義というのは、それぞれ主権の持つ国々を自分の主権の中にそのまま取り入れてしまうことです。ですから、王たちが自分の高官のようであると言っています。

それから彼らの高ぶりは、「前例があるから、次の成功する」というものに表れています。ここに出ってくる具体的な国名を見ると、次第に南下しているのが分かります。9 節以降の国名の列挙は、例えば「カルノもカルケミシュのよう」というのは、「カルケミシュは戦ってかったのだから、その南にあるカルノも同じように私たちの物にできるのだ。」ということです。ハマテはさらに南にあります。その手前、北にアルパデがあります。ハマテもアルパデのようではないか、というのは、アルパデを攻略したのだから、同じようにハマテも攻略できる、ということです。つまり、「前に成功しているのだから、次もそのようにするのだ。」ということです。

アッシリアは致命的な過ちを犯しました。北イスラエルには偶像がたくさんありました。彼らを倒

した時に、アッシリアはそれらの神々にアッシリアの神が征服したとみなしました。だから、エルサレムにおいても、その偶像の神を倒すことができると決め込んでいるのです。しかし、エルサレムの神は、偶像のように地域に限定されるような方ではありません。エルサレムにご自分の御名を置くことを選ばれましたが、天の天も収めることができないような大きな神、無限の方です。このことが真の神を怒らせます。偶像と同列にご自分を置くことによって、神の栄光を卑しいものに変えてしまったことに対して、怒りを発せられます。それが次の箇所です。

2C あべこべの役割 12-19

10:12 主はシオンの山、エルサレムで、ご自分のすべてのわざを成し遂げるとき、アッシリアの王の思い上がった心の果実、その高ぶる目の輝きを罰せられる。10:13 それは彼がこう言ったからである。「私は自分の手の力でやった。私の知恵でやった。私は賢いからだ。私が諸国の民の境を取り払い、彼らの蓄えを奪い、全能者のように住民をおとしめた。10:14 私の手は、諸国の民の財宝を巢のようにつかみ、私は、見捨てられた卵を集めるように地のすべてのものを集めたが、翼をはためかす者も、口を大きく開ける者も、鳴く者もいなかった。」10:15 斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができるだろうか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができるだろうか。それは、むちが、それを振り上げる人を動かし、杖が、木ではない人間を持ち上げるようなものではないか。

シオンの山、エルサレムには主ご自身がおられます。しかしアッシリアは、「私が、私が」と繰り返しています。自分の帝国主義を誇らしげに、捨てられた卵を集めること、彼らが無抵抗であったことを語っています。しかし、ここでとても大切な例えがあります。アッシリアは斧であって、木こりではありません。斧が木こりに対して誇っているのと同じだということです。今の言い方をすれば、手術を成功させた執刀医に対して、その使ったメスが誇っているという感じです。こうした高ぶりも、私たちには身近なものです。主に用いられている生活を送ると、それは自分が何かがあるからだろう、自分自身に栄光を返すことになってしまいます。

10:16 それゆえ、万軍の【主】、主はその最も肥え太った者たちをやつれさせ、その栄光のもとで、炎が燃え上がる。10:17 イスラエルの光は火となり、その聖なる方は炎となる。燃え上がって、そのおどろと茨を一日のうちになめ尽くす。10:18 主はその美しい林も果樹園も、また、たましいも、からだも滅ぼし尽くし、それは病人が痩せ衰えるときのようになる。10:19 その林の木の残りは数えるほどになり、子どもでもそれらを書き留められる。

この強大なアッシリアが、ここにあるように林の木々に火が付けられるように、一気にその力を失い、卑しめられることを宣言されています。その時に用いられるのは、紛れもなくイスラエル自身なのです。主は、イスラエルの光と火とすと言われています。エルサレムを包囲していたアッシリアの軍勢 18 万 5 千人が一夜にして、滅びます。この時からアッシリアは徐々に弱くなっていて、ニネベの陥落、最後はバビロンとのカルケミシュの戦いにて残党が倒れます。

2B 定められた壊滅 20-34

1C 残りの者の立ち返り 20-27

10:20 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、【主】に真実をもって頼る。10:21 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。10:22 たとえ、あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても、その中の残りの者だけが帰って来る。壊滅は定められ、義があふれようとしている。

「その日になると」とあります。これは、アッシリアに攻められる当時のエルサレムのみならず、主がご自分の計画を完成される、究極の主が定められた日ということです。つまり終わりの日ということです。イスラエルでも残された者たちを、主は聖別してくださいます。そこで彼らが行ったことが貴重です。「もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもって、たよる。」自分を打つ者というのは、アッシリアのことです。アハズが、自分を守るために自分をいじめる者に拠り頼むという、あまりにも自虐的な自傷行為です。しかし、私たちが恐れずに、心を砕いて、主の前に自分自身を持って行く時に、敵から救うという御業を行ってくださるのです。ちなみに 21 節、「残りの者が、立ち返る」という言葉がありますが、これはイザヤの息子、「シェアル・ヤシュブ」と同じであります。

そして、イスラエルの民が数多くいても、残りの者だけが立ち上がるという言葉も大切です。パウロはこれを、イエスを信じるユダヤ人のことを指してローマ書 9 章 27-28 節で引用しています。つまり、イスラエルの血縁的子孫だからと言って、自動的に救いに預かるのではないということです。彼らも狭き門であられる、イエス・キリストを信じて受け入れなければ滅んでしまうということです。

10:24 それゆえ、万軍の【神】、主はこう言われる。「シオンに住むわたしの民よ、アッシリアを恐れるな。彼がむちであなたを打ち、エジプトがしたように杖をあなたに振り上げて。10:25 もうほんの少いでわたしの憤りは終わり、わたしの怒りは彼らを滅ぼしてしまうから。10:26 オレブの岩でミディアンを打ったときのように、万軍の【主】が彼にむちを振り上げる。杖を海にかざして、エジプトにしたようにそれを上げる。10:27 その日になると、彼の重荷はあなたの肩から、彼のくびきはあなたの首から除かれる。くびきは脂肪のゆえに外される。」

アッシリアがエルサレムに示した憤りは、もう少しすれば終わると約束してくださっています。アッシリアがユダの町々を次々と倒していき、エルサレムを包囲するようになりましたが、それでも恐れなくてよいと救いを保証しておられます。以前に主が行われたことを引き合いに出して、アッシリアに対しても同じことを行なうと約束されています。ギデオンたちが、ミディアン人の王オレブをオレブの岩で殺した、とあります(士師 7:25)。また、出エジプトの時にエジプト軍を紅海で沈めた時のようなことをすると言われます。このようにして、自分にいつも負っていたくびきが解かれます。

2C 倒れる高い木 28-34

10:28 彼はアヤテに着き、ミグロンを過ぎ、ミクマスに荷を置く。10:29 彼らは峠を過ぎ、ゲバで野営する。ラマはおののき、サウルのギブアは逃げる。10:30 娘ガリムよ、甲高く叫べ。よく聞け、ライシャよ。哀れなアナトテ。10:31 マデメナは逃げ去り、ゲビムの住民は避難する。10:32 その日のうちに彼はノブで立ちとどまり、娘シオンの山、エルサレムの丘に向かって手を振り上げる。10:33 見よ、万軍の【主】、主が恐ろしい勢いで枝を切り払われる。丈の高いものは切り倒され、そびえたものは低くなる。10:34 主は林の茂みを鉄の斧で切り倒し、レバノンに力強い方によって倒される。

これらの町々の名前は、それぞれどこにあるかを調べると鮮明な臨場感に包まれます。アヤテというのは、ヨシュア記のアイの町と同じです。エルサレムから十数キロ北にある町です。そしてゲバ、ラマ、ギブア、ガリム、ラユシャ・・・と、どんどん南、南へ進んでいることがわかります。そしてノブはエルサレムに隣接する町です。今は、スコパス山というところだと言われていて、神殿の丘の北東、オリーブ山の北に隣接する山です。そこでこぶしを振り上げたわけです。しかし一夜にして18万5千人のアッシリア軍を、主の使いが打たれます。彼らの高ぶりを、たけの高い木々に例えています。レバノンの杉は非常にすばらしいものですが、それらに例えています。

3A 実を結ぶ御国 11-12

こうやって、主は高ぶりというものを低められます。高慢は、破滅に先立つと箴言にあるとおりです。そのような人間の国がある中で、主はへりくだった姿で世界を支配されるという、神の御国の幻をお見せになります。アッシリアの帝国主義と対比させて、一気に主ご自身の国を紹介されます。

1B エッサイの根

1C 主を知る統治 1-10

1D 主の霊 1-5

11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。11:2 その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。

再びイザヤは預言しました、メシアの出現の預言です。今、アッシリアが高くそびえる木に喩えられました。ここでは、すでに切り取られてしまった木々の中から、わずかに一つの根株に新芽が出ている、そして若枝が出ているという情景を描いています。これが、私たちの主イエス・キリストの姿です。「エッサイの根株」とありますが、イエス様の父ヨセフの時のダビデの家をよく表しています。ユダの国は、エホヤキンを最後として主は彼から王を出すことはさせないとエレミヤを通して宣言されました。バビロンに捕え移され、その後でゼルバベルなど総督で、ダビデ家の出身という者はいました。けれども、ダビデの家系は次第に削り取られていきます。紀元前から紀元後に移行する時には、ダビデ家はマタイ1章のバビロン捕囚以後の系図にあるように、細々となんとか保っていた、というところだったのです。しかし、そのような何にもない貧しい家庭の中に主がお生ま

れになりました。そして、この方がすくすくと育ち、若枝となり実を結ばせるようになるのです。

主が実を結ばせていかれるのは、御霊が彼の上に留まっているからです。福音書には、主が聖霊によってマリヤから生まれ、そして水のバプテスマを受けられる時に、鳩のような形をして聖霊が下られ、それから御霊によって荒野に入り、そして御霊の力を帯びて福音宣教活動を行われました。そして十字架への道も、ご自分の命を永遠の御霊によってお捧げになり、そして聖なる御霊によると、神が死者の中からの復活により、この方が確か神の御子であることが公に示されたのです。ですから、神の御霊がイエス様に留まっていたが、キリストに付く者にイエス様は、聖霊の約束をされました。

ここに主の御霊の特徴が書かれています。この方は「知恵」の御霊でありました。主ご自身が、知恵によって語られたので、そこには人々の納得があり、落ち着きがあり、一致がありました。そして、「悟り」の霊であります。主は、すべてのことを知っておられました。一つの状況を知っておられたので、人に教えてもらう必要がなかったのです。それから、「思慮の霊」であります。主が何かをご計画され、それに基づいて実行される時に、主の御霊によってその計画を立てられました。そこには主の知恵と思慮深さがあります。さらに、力の御霊が主にありました。それは力を示す働きに必要なことです。信仰によって、誰か足のなえた人を立たせることや、病を癒すことなど、力のともなう御霊の働きがあります。そして「主を恐れる、知識の霊」とありますが、「主を恐れる霊」であり、主の知識の霊と分けたほうがよいでしょう。主を恐れることによって、主を知ることができます。主を知るとは、親密に知っていること、人格的に知ることです。イエス様は主ご自身でありながら、主のしもべとして地上で生きて行かれ、父なる神を恐れつつ、そして父なる神を知る生活を歩まれました。

そして、しばしば黙示録にある、イエス様の姿が「七つの御霊」がおられたことが書かれていますが、このイザヤ書にある、御霊の七つの特徴ではないか？と言われます。

11:3 この方は【主】を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、11:4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。

イスラエルの国において、不正がはびこっていた時に、彼らは自分の勝手な判断で、裁判において判決を下していたという内容が 10 章 1-4 節にありました。しかし、ここで預言されている主の裁きはその正反対です。「【主】を恐れることを喜び」とあります。自分の意見や自分の気持ちではなく、主の語られることをそのまま基準とします。イエス様はこのことを思っただけで、次のように発言されています。「ヨハネ 5:30 わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」そして、主を恐れることの特徴は、「その目の見るとこ

ろによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず」ということであります。どんなに見た目が良かったとしても、聞いていることが心地よいとしても、それにしたがって判決を下してはならないということです。

そして、預言は一気に、再臨の中に入ります。初臨においての御霊の働きから、再臨においてアッシリアのように横暴に振る舞っている国々に対して、主はご自分の口という武器をもって、これらの世界から来た軍隊と戦われます。そしてこれらの悪者たちを滅ぼされます。

2D 平和の広がり 6-9

11:6 狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。11:7 雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巢に手を伸ばす。11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。【主】を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

これまで、主イエスが再臨されてここに立てられる主権は、世界に平和を及ぼすことが預言されていました。2章 1-5 節に幻でもそうでしたし、9章 7 節の神に与えられた子についての預言のそうでした。そしてその平和が、被造物全体に広がります。ノアの洪水の前のように、肉食動物がいなくなり、草食動物だけになります。それは、動物の世界にも争いがなくなるということです。なぜなら、主を知ることが全地に満ちるからだとあります。主を親しく知ることが、世界に浸透するので、それで動物界にまで及ぶ平和を享受できます。被造物が呻き始めたのは、アダムが罪を犯したからです。ですから、被造物が解放されるのも、人の罪が赦され、贖われるからです。「ローマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」主イエス様が再臨されたら、この地上をも贖われ、そして神の初めに意図されていた状態に回復します。

2C 残りの者の帰還 10-16

11:10 その日になると、エッセイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまるところは栄光に輝く。11:11 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りの者を買収られる。彼らは、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シンアル、ハマテ、海の島々に残っている者たちである。11:12 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

「その日」とあります。つまり、これは当時のアッシリア捕囚によって散らされた人々というよりも、終わりの日に実現する、世界離散から集められ一つにされるという約束であります。イエス様が言われました、「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」イスラエルにとって、約束の地から散らされて、諸国に住んでいるという離散は、救いにあずかれなかったと

いう意味合いを持っています。元々、アブラハムへの祝福にカナンの地を所有するというものがあったからです。ですから、そこから主が引き戻されるというのは、ここにあるように「買い取る」すなわち、贖うことを意味しています。ですから、再びイスラエルの地に集められるというのは、霊的にとても大切な意味を持っています。

そして、ここに書かれている国々を見ると、全世界的な範囲であることが分かります。アッシリアとエジプト、というだけで、世界的な二大国を網羅しています。それから、クシュはエチオピアとスーダンのことです。エラムはイランのこと、シヌアルはバビロンのこと。そして海の島々と世界に及んでいます。そこから連れ戻されます。

11:13 エフライムのねたみは去り、ユダに敵する者は断ち切られる。エフライムはユダをねたまず、ユダもエフライムを敵としない。11:14 彼らは西の方、ペリシテ人の肩に飛びかかり、ともに東の子らからかすめ奪う。彼らはエドムとモアブにも手を伸ばし、アンモン人も彼らに従う。

イスラエルの回復は、ソロモンの死後分裂したその傷の癒しも含まれます。エフライムとユダはずっと、妬みの中でありました。仲間でありながら競争していました。アハズとペカは敵対関係にいました。しかし、主がその間に仲直り、和解を与えてくださっています。それゆえ、一つにされたイスラエルは強いのです。ペリシテ人も齒向かうことができなくなり、その他の周囲の民もイスラエルに従うようになります。このようにして一つにされるということは、反対者に対して、敵に対して滅びをもたらすしるしとなるのです。

11:15 主はエジプトの海の入江を干上がらせ、また、その焼けつく風の中に御手を川に向かって振り動かし、それを打って、七つの流れとし、くつばきのままで歩けるようにする。11:16 残される御民の残りの者のためにアッシリアからの大路が備えられる。イスラエルがエジプトの国から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。

エッセイの根によって、神の国がこのように広がりますが、最後は残された民のための大路を神が備えてくださる、というものです。聞いているイスラエル人たちは、南はエジプト、北はアッシリアという二つの国に板挟みになっていることを知っています。そこに大路が備えられるということは、そのような大国のせめぎ合いがあるのに、主がそこを贖われた民のために通れるようにされるのです。そして、エジプトもアッシリアもその真ん中にあるイスラエルに住まわれる神を認めています。再び 19 章の預言にも出てきます。ゆえに、エジプトからアッシリアまで続く大路が大きな意味を持つのです。この一帯が、主を礼拝する地域一帯だということです。エデンの園も、北アフリカからイランまでの広範囲でありました。

4B 救いの喜び 12

そしてイザヤは、残りの民を代表して歌い始めます。

1C 救いの保証 1-3

12:1 その日、あなたは言う。「【主】よ、感謝します。あなたは私に怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださったからです。」12:2 見よ、神は私の救い。私は信頼して恐れない。ヤハ、【主】は私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。12:3 あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から。

午前礼拝で学びました、主の与える救いは、神の怒りからの救いです。イザヤが今、イスラエルに対して神が怒りを示されましたが、それは一時的であり、過ぎ去ったと言っています。そして、大事なものは、救いは神からのものだ、ということです。彼らがしたことは、悪だけでした。自分たちでしたことに従えば、滅んでいなければならなかったのです。それにも関わらず、主がご自分の栄誉にかけて、キリストによって彼らを回復されるのです。そして神が救われたという確信を持っている人は、安心できます。「私は信頼して恐れない」というのは、安心しているという主の救いの恵み、その安定感を言い表しています。どんなことがあっても、主は私を見捨てておられないという安心感です。そしてそこから、喜びが溢れ出ます。

そして、そのことを、泉から水を汲むこととして表現しています。私たちの良く知っている「マイム・マイム」は、ここから歌詞を取っています。そこでこの「救い」というところは、イエシュアと発音されます。これこそ、イエスのヘブライ語です。イエスの名の意味は、「主は救い」であります。イザヤが預言していた救い主は、まぎれもなくイエスご自身なのです。なので、イエス様はヨハネの福音書などで、ご自身から水を飲むことについて話されました。サマリアの女に対して、また仮庵の祭りの時にもそうでした。

2C 喜びの歌と宣言 4-6

12:4 その日、あなたがたは言う。「【主】に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。そのみわざを、もろもろの民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。12:5 【主】をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを全地に知らせよ。12:6 シオンに住む者よ。大声をあげて喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる大いなる方。」

主に感謝し、ほめたたえています。もしその心が真実なものであるなら、公の場において証しを立てます。主への感謝や賛美、礼拝は感情のものではありません。公にして分かち合っていく必要があるのです。ですから、主の御名を呼び求めます。そして御業を、国々の民、すなわち神をまだ知らない人々に知らせます。その救いの名があがめられていることを語ります。これが私たちの伝道、宣教の動機になります。救いの喜びです。そして、礼拝の喜びも、「あなたの中におられる大いなる方」ということで表れています。

ウジヤが死んだのは紀元前 740 年ですが、745 年にアッシリアのティグラト・ピレセルが王位につき、周囲の国々の侵略を開始していました。

紀元前 734 年にティグラト・ピレセルはイスラエルの海沿いを南下して、エジプトの国境まで行きます。733 年には、北イスラエルの多くに侵略して、多くを捕え移します。「2列王 15:29 イスラエルの王ペカの時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが来て、イヨン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツォル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリアへ捕らえ移した。」

ここに、「アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカ」が登場します。レツインは、アラム(シリア)の最後の王で、これからの預言で見るようにアッシリアの王ティグラト・ピレセルが、紀元前 732 年にダマスコを滅ぼします。そして、ペカは北イスラエルの最後から二番目の王です。

列王記第二 16 章 7 節以降に、アハズがアッシリアに贈り物をして、それでアッシリアにこの二国を倒してくれるように頼みました。はたして、アッシリアは彼の願いを聞いて、それでダマスコを攻め取ったのです。けれども、問題はそれで終わりませんでした。アッシリアはユダにも進出してきたのです。「2歴代 28:20 アッシリアの王ティグラト・ピレセルは彼のところに来たが、彼の力になるどころか、むしろ彼を苦しめた。」とあります。